

きよたまちづくり区民会議通信

第 2 号

発行元 きよたまちづくり区民会議 (事務局: 清田区市民部地域振興課)

〒004-8612 札幌市清田区平岡 1 条 1 丁目

電話 011-889-2400

きよたまちづくり区民会議では、平成 23 年度は「防災」をテーマに検討を進めています。

防災アンケートを実施

23 年 8 月から 9 月にかけて、区民会議では、皆さんの家庭やお住まいの地域に対して災害への備えをどのように働きかけていくか検討するため、清田区にお住まいの皆さんの意識調査として「防災アンケート」を実施しました。

町内会をはじめ皆さんのご協力のおかげで、回収率 65%と、たくさんの回答をいただくことができました。結果は 2 ページへ

きよたまちづくり区民会議 (23 年度第 2 回) を開催

9 月 29 日、今年度第 2 回の区民会議を開催しました。

会議では、防災アンケートの実施状況について報告されたほか、11 月 4 日開催の「清田区民フォーラム」の内容などについて話し合われました。

区民会議の様子



清田区民フォーラム 2011 を開催

清田区民フォーラムは、清田区と共催で、清田区が誕生した 11 月 4 日に開催。今年は「防災」をテーマとして、まず、先に実施した「防災アンケート」の結果について林 進一幹事長から説明。続いて、阪神・淡路大震災の語り部として、その経験や教訓を全国に発信する「城戸 秀則氏」を神戸からお招きし、震災体験をとおしたコミュニティの役割や避難所での体験などについて、住民目線でお話しをいただきました。

(講演の内容は 4 ページ)

講師プロフィール きど ひでのり 城戸 秀則 氏 (神戸市在住 57 歳)

- ・阪神・淡路大震災後、地域防災のスクラム作りに取り組んでおられる一方で、震災の語り部として、全国各地で講演活動を行っています。
- ・主な経歴: 兵庫県復興フォローアップ委員会委員、兵庫県教育委員会地域教育推進委員、神戸市まちづくり委員、大日通周辺地区まちづくりを考える会会長(大日通周辺地区街づくりを考える会では、災害時に住民が力を合わせるには日頃の人と人とのつながりこそ重要であるという教訓のもと、地域全体の参加による独自の防災活動を展開しています。)、ほか。

青木 一夫 区民会議議長の挨拶



林 進一 区民会議幹事長の発表



城戸 秀則氏の講演



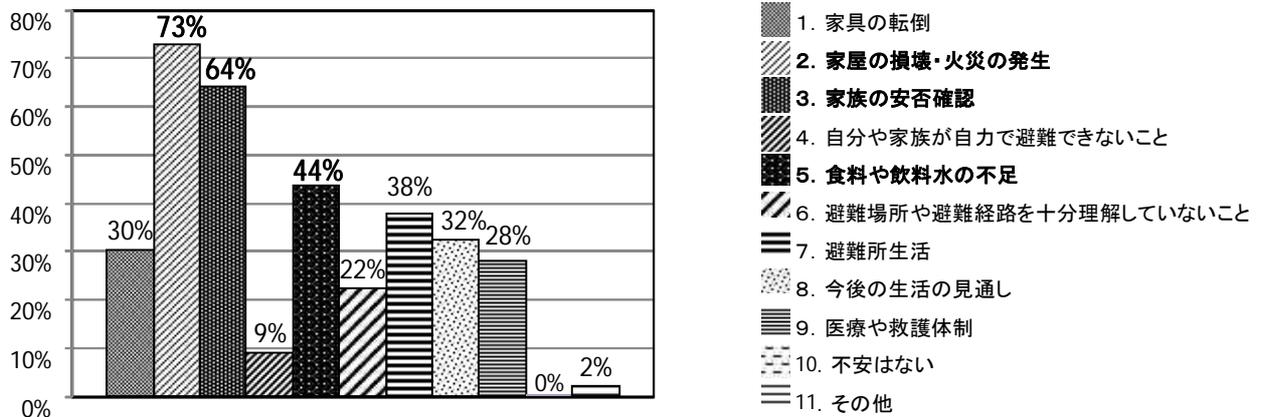
防災アンケートの結果と今後の活動

清田区の防災意識の実態は・・・災害に備えて対策をしている家庭は概ね3割

今回の調査で、清田区の皆さんの防災意識の実態について、概ね把握することができました。震災後ということもあり、アンケートの回収率も大変高かったことから、防災に関する高い関心をうかがうことができました。しかし、一方で、各家庭での災害に対する日頃の備えは決して十分ではないということがわかりました。そして、町内会の防災訓練に参加している人が非常に少ないという現実もあります。

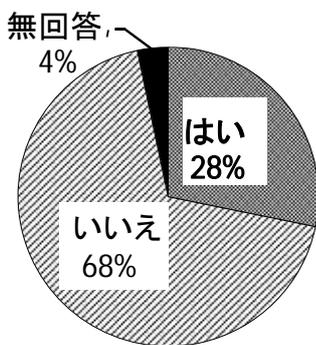
きよたまちづくり区民会議 防災アンケート結果 (一般世帯用・抜粋)

問1 災害が発生した場合、特に不安に思うことはどれですか(複数選択可)

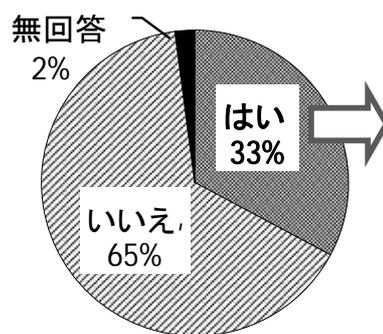


問2 あなたの家庭では、災害に備えてどのような対策をしていますか。

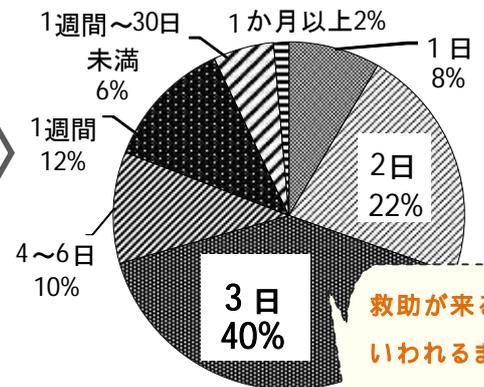
1. 家具の転倒・落下防止措置をしていますか。



2. 非常用食品・飲料水を日頃から準備していますか。

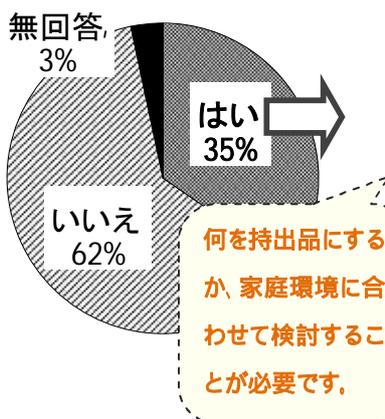


3. それは何日分くらい準備していますか。

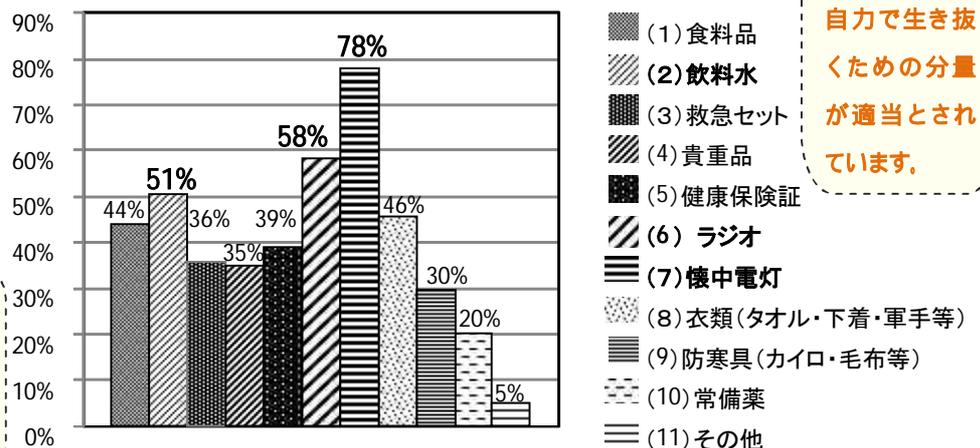


救助が来るといわれるまでの3日間を、自力で生き抜くための分量が適当とされています。

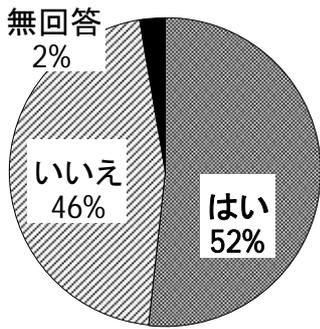
4. 非常持出品をすぐに持ち出せるよう準備していますか。



5. どんな内容を準備していますか(複数選択可)。



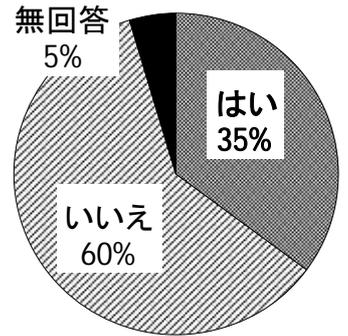
6. 避難場所や避難経路を知っていますか。



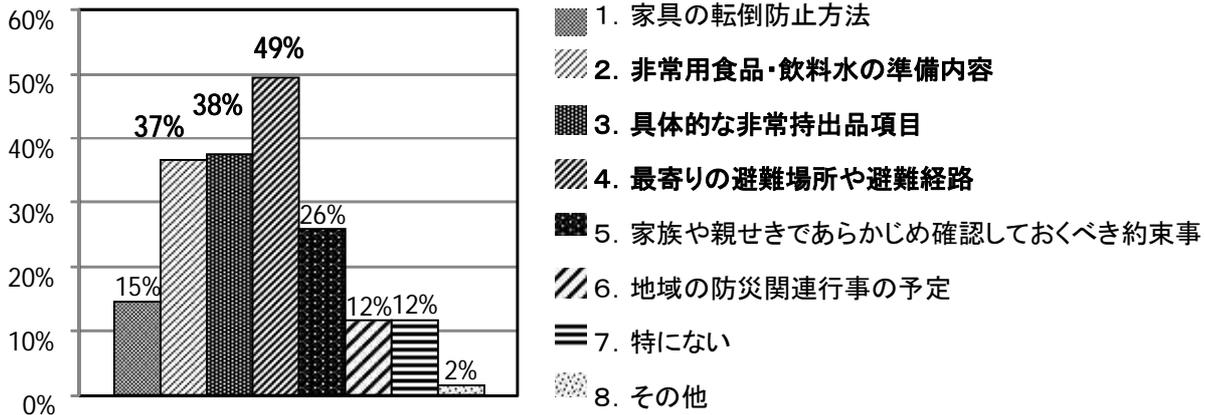
自分の避難場所は、特定の避難所に決められていません

どのような災害が発生し、自分がどこにいるかによって、避難する場所は当然変わりますので、日頃から避難場所を知っておくことが大事です。また、家族がバラバラの時に災害が発生した場合に、最終的にどこの避難場所で落ち合うかを決めておくのも非常に大切です。

7. 災害が発生した時の連絡方法や集合場所などについて、家族で話し合っていますか。

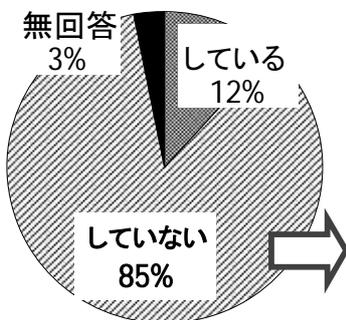


問3 今後の災害対策として詳しく知りたいことは何ですか(複数選択可)。

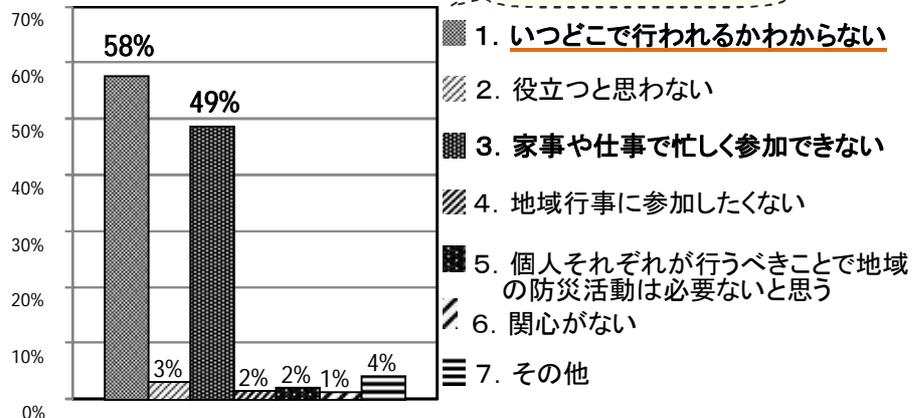


問4 あなたの家庭では、地域で行われる避難訓練等の防災活動に参加していますか。

4-2 また、参加していない理由を教えてください(複数選択可)。



参加していない理由は



今後の活動について

区民会議では、今年度、地域の防災意識の向上に向けて、次のように啓発を図っていきます。

各家庭へ配布するパンフレットを発行します

今回の調査結果を受け、今年度末をめどにパンフレットを作成し、各家庭に配布します。

内容は、防災に関する基本的な心構えや、今回のアンケート結果をはじめ、アンケートの中で詳しく知りたいとされたこと、地域での取組事例など、清田区独自の内容も盛り込みたいと考えています。

町内会へアンケートの集計結果をお知らせします

今回の調査結果について、集計データを地区別、単位町内会別に整理して各まちづくりセンターへ配布します。集計データを今後の町内会の取組に役立ててもらえればと考えています。

清田区民フォーラム 城戸 秀則氏 講演内容

「阪神・淡路大震災の体験
をとおして」(抜粋・要旨)
(平成23年11月4日、
会場 清田区民センター)

平成7年1月17日午前5時46分に震度7、マグニチュード7.6の大きな地震に遭いました。たった2分で亡くなった方は6,434人。最初の48時間は近所の力で生き延びました。72時間経つと、自衛隊や近隣の都市からの応援も来ましたが、潰れた建物の「この場所にあのおじいさんは寝ているからそこを掘ってください。」まちを知り尽くした自治会、婦人会、老人会そういう皆の力のおかげで、助かる命がいっぱいありました。

避難所生活、1日目は生き残った事を素直に良かったと皆で話し合いました。亡くなった人も避難所に運ばれてきます。毛布だけ掛け状態の状態で安置し、同じ屋根の下で過ごしました。3日目になり自衛隊が来られて、遺体は別な場所に集めてくださり、着きは出しました。最初は皆で譲り合い柔らかい関係もありましたが、1週間も経つと、だんだん不満が募ってきます。家や職場の片づけなどをして、ヘトヘトになって避難所に帰ってきてても、布団と布団が引っ付く程の狭さ

で、なかなか寝られない。ペット連れの方も少なからずいました。余震が続くと、普段と違ってペットも糞尿、粗相をします。疲れて帰ってきた自分の布団にペットの糞尿がかかっていたため「犬や猫は外に出してしまえ」という話にもなりました。今思えば、どこか部屋の一部をペットだけの為の部屋にすれば良かったのですが、疲れと、余震と、先が見えない事で、そんな簡単な事さえもあの非常時には浮びませんでした。

あの非常時の中で、「何か手伝えることはありませんか」と言ってくれた小学校高学年から中学生位の人力はものすごく助かりました。ひと月位経つと家に帰る人もいましたが、全国から届いた様々な支援が帰宅した人まで届かないこともでてきて「避難所にいる方が得だ」みたいな話も出たりしました。そこで、小中学生の力を借りて、家に帰った人々を訪問し「足りない物を言ってください。」「なんとか届ける手配をします。」という配慮を始めました。その時、一緒に行ってくれたのも、自治会、婦人会の人です。日が経つにつれ、エゴが出てギズギスしてくる中、日頃から顔が見えている人が間に入り、柔

らかい解決ができたのです。まさに、まちは自分達で守っていくという実践事例になったと思います。

神戸では6千人以上の人が亡くなった経験を踏まえ、既存の自治会など日頃の活動の先輩達と新しく僕ら位の世代の者で、地震の時に助けてもらった者が一緒に何かやっていると、まちづくりの中に防災を入れるようになりました。例えば小学校の先生やPTAの方々には、まちの宝物である子供を皆で守っていきましよう提案をさせていただきました。1つは、小学校の持つ悩みや危機感に十分配慮し、避難訓練を子供達目線でやりましよう。例えば先生方に車椅子に乗ってもらい、坂道を押して上がることや、18入りのポリタンクに水を入れて運ぶこと、子供さんを背負って坂道を歩くことがどれほど辛い事が、少しずつ小学校の皆様の理解をいただき、運動会の中に避難訓練に近い競技を入れていただく。小学校6年間防災の気持ちを持ち、中学校でも持ち続けてくれることを思い活動を続けています。

まちづくりは行政などをお願いをするのではなく、そこに住んでいる人が先頭に立って自分達でまちを

作る。震災を体験し、そういう気持ちで進んでいます。大きなまち札幌では、マンションに住んでいる人の顔がなかなか見えない、若い方が訓練などで我々の思いになかなか寄ってきてくれないかも知れませんが、ちょっと応援、まちづくりみんなできようという発信をして、少しずつ仲間を増やしていき、顔が分かる、話をしたことがある、挨拶をしたことがある、夏祭りと一緒にあったことがある、そういう関係を積み上げていければと思います。

災害が起こった時のために、区民会議の皆様が行ったアンケートや、その結果を冊子にして配布するという地道な活動が、必ずいざという時に役に立ちます。すぐ成果が表れない事を、まちづくりや防災活動に興味のない人にとっては「何してるんだろう」と思われるかも知れませんが、震災から17年経ち、同じ思いを持った神戸はその動きがわりとうまくできていますが、清田の皆様はまだ恐ろしい出来事を共有しているわけではないです。その最中での活動は日々大変とは思いますが、くじけず積み上げていけば、必ず災害の中で生きた事ができると思います。